

暮らしをまもる市政へ全力



野洲市議会議員

小菅むつお

こす が

日本共産党

小菅むつおさんのプロフィール

昭和26年、滋賀県多賀町で4人姉兄弟の3番目として生まれました。家は専業農家で、「勉強せよ」と言わない父と母のもと、のんびりと「育ててもらい」、自宅近くの溜め池で釣りに没頭していた少年時代。この時代が今の小菅さんの「おおらかな」性格を形成させたようです。

野洲高校卒業後、森下製薬の薬理研究所に就職。労働組合運動や青年運動で青春を謳歌しました。中主町議会議員に当選したとき、会社は、「休職(解雇)」処分に。小菅さんは、「公民権の行使を否定するな」と闘争。5年間に渡る裁判で「解雇」を撤回させた不屈のがんばりやです。

昭和54年に中主町議会議員に当選、27歳の時でした。国保税引き下げや学童保育所つくりに奔走。不正を許さない小菅さんは、「乙窪工場団地」の公金による企業のための橋設置問題などを、一貫して追及しました。

昨年の合併で野洲市議会議員になりました。「新幹線新駅への負担をやめ、大切な税金は暮らし優先」と運動をすすめ、市民のみなさんとがんばる毎日です。

(住所) 比江668-3 (家族) 妻、長男
(電話) 589-4971
(Eメール) shgdy177@ybb.ne.jp
(ホームページ) <http://www.yasusigi.net/~kosuga/>

この地域でがんばります	
小菅むつお	旧中主町、篠原学区、祇王学区
野並きょう子	北野学区、野洲学区、三上学区

やす民報

日本共産党野洲市委員会が見解を発表しましたのでお知らせします。
日本共産党野洲市委員会 2005年8月1日 №42

福祉・暮らしを守ってください

元近畿高等看護専門学校副校長 北出貴美子(堤在住)

小菅さんに期待します

小菅さんに、国保税や介護保険料引き下げなどの署名運動の相談にも親身にのっていただきました。とりわけ、「乳幼児医療費の無料化拡大」の請願の紹介議員になってください、この運動が力になって、小学校入学前までの無料化が実現しました。娘や2人の孫が本当に助かっています。

このように私たち市民の願いに、まっすぐひたむきに取り組んでくれるのが小菅さんです。誠実で穏やかな小菅さんですが、町議会では、舌鋒鋭く、誰もが納得できる論戦で追及しています。保守町政のなかで、小菅さんがいなかったら、どうなっていたのかと思います。

私たちの願いを、まっすぐ届けてくれる小菅さんに、引き続き、市議会ががんばってくれるよう期待しています。

市民の切実な願いを届けます



野洲市議会議員

小菅むつお

27歳で中主町議会にお送りいただき、合併後は市議会としてがんばらさせていただきました。この26年間は、懐かしくもあり、あつという間の議員活動でした。この間、みなさんとともに、「住民こそ主人公」をモットーに、切実な願いを議会に届けてきました。

いま野洲市では、国保税や介護保険料を値上げるなど、市民の暮らしと健康が脅かされています。このような政治を、なんとしても変えなければと思います。昨年10月合併となりました。新しい野洲市が、これまでの二町のよさを継承しながら、暮らし優先で、福祉・医療を伸ばす市政でなくてはなりません。

これまでの経験を生かし、切実な願いを市議会に届け、「住んでよかった」といえる、まちづくりへ、引き続き、全力でがんばります。ご支援心からお願い申し上げます。

住民本位をつらぬき26年 27歳で町議会に

しかし、町長や保守系議員は、強く反対。それどころか、「引き下げを求める署名」の運動をすすめる町民に、保守系議員が「圧力」までかけました。それでも、小菅さんは、「引き下げを求める会」をつくり、繰り返し、署名運動や議会でも要求。ついに引き下げが実現。当時、県下で国保税を引き下げた数少ない自治体となりました。切実な願いの実現には、とことん粘り強くがんばる小菅さんです。この経験は野洲市議会でも発揮されています。



当時、中主町の国保税は、県下で一番高く、小菅さんは、町議会でも「町民の健康を守るのは行政の責任。国保税を引き下げよ」と要求しました。

県下で一番高かった 国保税の引き下げが実現

万円もの「宴会費」をやめさせました。

暮らし優先の町政へ全力

野洲町から中主町に移住し 初めての日本共産党の議員に

森下製菓（大篠原）で働いていた小菅さんは、27歳のとき、野洲町から中主町に引っ越し、町会議員選挙に出馬しました。「共産党の進出を許すな」と激しい攻撃も受けましたが、見事に当選、町民の良識が発揮されました。小菅さんの進出以来、町政と町議会が一変。町民の声が届く議会へと変わりました。

「そんな質問だ」の攻撃に屈せず

税金による飲み食いをもストップ

議員が税金で飲み食いするのは当たり前。「言論の府」とは、ほど遠いのが当時の議会でした。また、「共産党の質問には、まともに答えるな」という攻撃まで加えられました。

無我夢中の小菅さんでしたが、毎議会質問。「議員が税金を使つての飲み食いをやめよ」と追及。保守系議員から、「こんな質問はケシカラン。懲罰だ」と攻撃までされましたが、年80

なにごとにも一生懸命 粘り強く署名運動

みなさんと一緒に実現してきました

乳幼児医療費を小学校入学前まで無料化にしました
合併後の中学校給食実施を一貫して要求。新市では全中学校で実施されることになりました
障害者、母子父子家庭の医療費無料化を存続させました
学童保育所の公設化、保育室の増築をすすめました
毎議会、「一般質問」をおこない、「議会報告」を発行。町政と市政を身近にし、市民本位の市政をすすめてきました



ための「議員提案」をしたのです。まさに世論と運動の成果です。このようながんばりは、新市での小学校入学前までの無料化拡大につながりました。

子どもの医療費無料化を拡大

「子どもはまちの宝」が信念

お母さんらと必死の運動で実現

長男が生後三ヶ月のとき大病した経験をもつ小菅さん。「子どもを安心して育てられる政治」が信条です。議会でも繰り返し、「医療費無料化の拡大」を要求。町長や議会は、「やらない。できない」の一点張りです。そのため、みなさんと繰り返し署名運動をおこなってきました。共産党が中主議会で二議席の時には、「議案提案権」を生かし、無料化拡大の条例提案もおこないました。それでも保守系議員は反対し、切実な願いに背を向けました。

反対していた保守系議員がついに 無料化拡大の提案をする事態に

その後も、議会での要求や、お母さん達と、雨の日も、夏の暑い日も各戸訪問で、汗を拭き拭き署名を集めました。これらの運動が実り、あれほど反対していた保守系議員が、無料拡大の

中主・野洲の合併でも 2町のよき制度を守れ

市議会で「合併で値上げになることは約束違反」、水道会計における「企業努力」や「国の合併補助金の投入」を提案、値上げの矛盾を追及しました。このような小菅さんの緻密な調査や説得力ある質問に、他の議員からも「値上げはいけない」と言わせるなど、町民の大きな世論になりました。その結果、平成18年度からの料金は、旧野洲町では、1000円（2ヶ月・50トン使用の場合＝市案）の引き下げが実現。「値上げ必至」といわれていた旧中主町では据え置きとなります。



水道料金は合併協議で、中主町は大変高くなる計画でした。小菅さんは、町議会や合併後の

緻密な調査と追及で 水道料金の値下げを実現

ら実施されることになりました。

中学校給食の実施を一貫して要求



今回の合併でも、「野洲町と中主町のよき制度を守り広げよ」と要求し続けた小菅さんです。

合併問題も、ほとんどの議員は中主町議会本会議で質問しませんでした。しかも、保守系議員は、「合併問題特別委員会」から小菅さんだけを不当に排除し推進しました。

合併問題は「住民にとって大事な問題。住民の立場から議論を」と一般質問で徹底して取り上げたのが小菅さんです。

中学校給食の実施を 議会で一貫して要求

「中学校給食の存続」は大きな問題のひとつでした。合併協議で野洲町側は、中学校での実施に難色を示し、いずれ中主町の給食は廃止されかねない事態でした。「学校給食は教育の一環。野洲町でも、中学校給食の実施は切実な願い」と新市の全校で実施することを毎議会のように要求しました。その結果、全中学校で、平成19年度か

これからみなさんと 力をあわせて

お約束



介護保険料・利用料の減額・免除制度を充実させます

国民健康保険税を引き下げます

住宅リフォーム補助制度をつくり、地域経済を活性化させます
3人目の保育料を無料にし、子育てを応援します

自然と環境を守り、住んでよかったまちづくりをすすめます

食糧と農業、地場産業の振興をはかります

同和行政を終結し、公正で民主的な行政をすすめます

新幹線栗東新駅の負担金（2億6900万円）に反対します

願い実現へがんばります

日本共産党の議員だからこそ、
市民こそ主人公の市政をめざします



戦後60年。いま、平和憲法が脅かされています。また、「学校を卒業しても働くところがない」「年金・医療が、ますます心配」など、不安の声が渦巻いています。

いまの政治は、「アメリカや大企業言いなり」で、国民に犠牲を押し付けています。

日本共産党は、第9条を持つ平和憲法を守ります。福祉の後退を許さず、くらしを守る政治へ、大企業に「当たり前の社会的責任を果たす」ことを求めています。国でも野洲市でも、このような立場で主張と活動ができるのは、あの侵略戦争に命を

かけて反対し続けた政党だからです。また、企業や団体から汚れたお金を受け取らない清潔な政党だからです。だからこそ、だれに遠慮することなく、「市民こそ主人公」の政治を貫くことができます。